

本学のスキー実習における学生の取り組みと学修成果 および満足度に関する報告

田 中 淳^{*1} 高 見 彰^{*2}

Effort to Learn, Results and Satisfaction in a College Ski Program

Jun Tanaka^{*1} Akira Takami^{*2}

Abstract

The purpose of this study is to examine the effort to learn, learning effect and satisfaction in a college ski program. The following result were obtained. 1) The students who made great efforts were significantly higher than the other in all questionnaire items of effort. 2) The high-achieving group scored significantly higher than the others at all questionnaire items on learning effect. 3) The satisfied group were significantly higher than the others in all questions on satisfaction. The result showed that most participants make a great effort and gain a positive learning effect in skiing knowledge and skills. Furthermore, they were satisfied with not only the practical program but also the environment. However, it is suggested that objective evaluation is needed on the achievement of skiing knowledge and skills.

キーワード

スキー、スキー実習、取り組み、学修成果、満足度

I. はじめに

スキーは、自らの意思で、自由に滑るという運動そのものを楽しむことができ、自然とのふれあい、仲間との交流などを生きいきと体験できる文化である⁶⁾。また緩やかな起伏のある雪原や、林の中を歩いたり、走ったり、滑ったりする全身運動、山頂から自然の地形に沿ってスピードを楽しんだり、自在に幾何学的曲線を描きながら一気にふもとまで滑り降りるスリルと爽快感は、身体運動と精神衛生的な満足により日ごろの仕事や生活の中でのストレス解消となる効用がある⁷⁾。

*1 たなか じゅん：大阪国際大学人間科学部准教授（2020.12.4受理）

*2 たかみ あきら：大阪国際大学人間科学部准教授

このようなスキーの特性から、多くの大学では自然体験型の実習としてスキー実習を実施しており、新井ら¹⁾はスキー・スノーボード実習の実態調査を行い、回答を得た491機関のうち194機関(実施率39.5%)が実施していると報告している。

スキーのような体育やスポーツ活動が人間形成に有益にかかわっていることは一般的に知られており、中澤ら²⁾は大学のスキー実習における受講生の社会的スキルの向上効果を研究し、コミュニケーションおよび問題解決のスキル向上が確認されたと報告している。また大学のスキー実習により経済産業省の提唱する社会人基礎力36項目のうち、26項目で向上が認められたとの報告もある¹⁰⁾。そして蓬田ら¹⁴⁾はスキー実習参加者のスキーに対する魅力認知について調査し、参加学生が社交性、仲間との学習などを認知していることを明らかにした。

しかしながらスキー・スノーボード人口は、1998年の1,800万人をピークに2017年で620万人まで減少してきており⁴⁾、近年の海外からの旅行者により回復の兆しは見えているものの、未だ低いのが現状である。日本修学旅行協会の調査⁵⁾では、修学旅行でスキーを実施している学校は年々減少していることが報告されており、スキー実習を実施している大学数も減少していることが推測される。

大学におけるスキー実習の教育的効果は多くの研究により明らかになっているが、今後も実習を継続させるためには、その目的や教育的意義を明確にするとともに学修成果を評価する体制の構築が必要である。

そこで本研究では、2019年度に開講した本学でのスキー実習を対象として、学生の実習への取り組みと学修成果および満足度について調査し、今後のスキー実習の在り方について検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 対象

2019年度のスキー実習を受講した人間科学部スポーツ行動学科72名(1年生66名、2年生3名、3年生1名、4年生2名)であった。

2. 実習の目的

本実習は教員免許取得や健康づくりの指導者を目指す学生が、冬季スポーツプログラムのマネジメント学ぶための授業として位置付けられており、「スキーの知識や技術を学ぶと同時に冬季スポーツや雪山での生活についての理解を深めること」、「団体生活を通して正しい人間関係や社会的態度を向上させること」、そして「非日常的な雪山の自然環境を体験することで指導者としての資質を向上させること」を目的として実施した。

3. 実習の内容

1) 実施日程および実習地

2019年度スキー実習は、2020年2月2日～2月7日(5泊6日)にかけて長野県北安曇郡白馬村の白馬岩岳スノーフィールドおよび拇池高原スキー場で実施した。

本学のスキー実習における学生の取り組みと学修成果および満足度に関する報告

なお本スキー実習を実施した2019-2020シーズンは歴史的な少雪で、白馬岩岳スノーフィールドは滑走可能エリアがゴンドラ上部のみと限られ、柵池高原においても土や草の見える箇所があり、一部のコースは閉鎖されている状況であった。できるだけ良いコンディションで練習をするために、技術の上達に合わせて、班ごとにスキー場を選択しながら講習を実施した。

現地での実習については、ゲレンデにおけるスキー技術の講習だけでなく、雪国の暮らしや雪山の自然を学ぶための講習会も取り入れ、また実習日誌や班別ミーティングを活用することで効果的な学修ができるように工夫をして実習を運営した。表1は現地での実習の日程表である。

表1 日程表

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
7:00		現地到着	起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食	起床 朝食
8:00						
9:00			実技講習	実技講習	実技講習	実技講習
10:00						
11:00		昼食				昼食
12:00			昼食	昼食	昼食	閉校式
13:00		開校式	実技講習	実技講習	実技講習	
14:00		実技講習				現地出発
15:00						
16:00						
17:00						
18:00		夕食	夕食	夕食	夕食	
19:00						
20:00	大学集合	講義	班別ミーティング	講義	班別ミーティング	
21:00						
22:00	大学出発	点呼・消灯	点呼・消灯	点呼・消灯	点呼・消灯	大学到着

2) 事前指導

実習前には4回的事前指導(各90分)を実施した。表2は第1回から第4回的事前指導の日程および内容である。主に実習の目的や概要、実習中のスケジュールやルール、スキースキの基礎知識と安全管理、体調管理や準備物等について説明した。

表2 事前指導の日程および内容

	日 程	内 容
第1回	2019年10月17日	実習の目的および概要について
第2回	2019年11月21日	実習スケジュール、生活および講習のルール
第3回	2019年12月19日	スキースキの基礎知識、ゲレンデのルール(安全について)
第4回	2020年 1月23日	準備物および体調管理について、実習全体の確認

3) スキースキ実技講習

雪上でのスキースキ講習では、技術レベルに応じて適切な指導を行うために技能レベルごとに分けて班編成を実施した。まず実習前の事前学習時に自身の技術レベルを考え、「歩行、基礎練習グループ」(初級班)と「中・上級者グループ」(中・上級班)のどちらかを選択させた。実習初日にはまず初級班と中・上級班に分かれ、そこから初級班を7班に、中・上級班を2班に分けて講習を実施した。各班の人数は6~10名とした。

実習3日目と5日目の夜には、宿舎にて班別ミーティングを実施し、雪上で実施した練習内容の復習と翌日の課題を確認する時間を設けた。

4) 雪山およびスキースキ理論に関する講義

実習2日目と4日目の夜には、宿舎にて「雪山に関する講義」および「スキースキ理論に関する講義」を実施した。

「雪山に関する講義」では、宿舎のオーナーであり、長野県スキースキ連盟元会長である矢口公勝氏が白馬地域の自然や気候の特徴やこの地域の方々がどのような生活をしているか等、受講生が今までに体験したことのない事例を紹介した。

また雪山やゲレンデで観察できる動物やその足跡、雪山でのアクティビティーなど雪山での楽しみ方についての講義も実施した。

「スキースキ理論に関する講義」では、スキースキ教程⁶⁾の内容に基づいたブルークボーゲンからブルークターン、そしてパラレルターンへつながる技術体系や基本的なスキースキ操作である荷重、角付け、回旋についての説明を中心に実施した。

4. 指導体制

指導者は大阪国際大学人間科学部スポーツ行動学科の教員9名、および全日本スキースキ連

盟公認白馬岩岳スキースクールのインストラクター5名の計14名であった。

実習班は技術レベル別に9班に分かれ、大学教員4名、インストラクター5名が指導を担当した。

5. 学生の取り組み、学修成果、満足度の調査

本研究では、スキー実習での学生の取り組み、学修成果および満足度を評価するために東山ら²⁾や永井ら¹¹⁾が作成したアンケートを修正して調査を実施した。

1) 学生の取り組みについて

本実習において目的とした学修の実践に受講生がどのように取り組むことができたかを評価するため、5項目の質問を設定し「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評価で回答を求めた。以下に設定した5項目の質問を示す。

- (質問1) 雪上講習に積極的に取り組みましたか
- (質問2) 夜の講義、実習日誌の作成にしっかりと取り組みましたか
- (質問3) 体調の管理やケガの予防に努めましたか
- (質問4) 宿舎では部屋を整理整頓し、規律を守って生活できましたか
- (質問5) 実習(全体)に積極的に取り組みましたか

2) 学修成果について

本実習において目的とした学修成果を評価するために、以下の3項目の質問についてアンケートを実施した。各項目の回答は質問内容によって異なるが、「身についた/完全に達成できた/しっかりと達成できた」から「身についていない/全く達成できなかった/全く実施できなかった」の6段階評価で回答を求めた。

- (質問1) スキーを安全・快適に実施するための知識や技能が身につきましたか
- (質問2) 自分の立てた目標をどのくらい達成できましたか
- (質問3) 団体行動や他の仲間との共同生活はしっかりと実施できましたか

3) 満足度について

本実習の学生の満足度を評価するため、4項目の質問を設定して「とてもそう思う」から「そう思わない」の5段階評価で回答を求めた。以下に設定した5項目の質問を示す。

- (質問1) 講習内容は満足できるものでしたか
- (質問2) 夜の講義内容は満足できるものでしたか
- (質問3) 宿舎での生活は快適で、満足できるものでしたか
- (質問4) 実習全体を通して満足できる内容でしたか

なおアンケート調査は実習最終日に実施し、有効回答率は70名(97.2%)であった。

アンケート結果について、学生の取り組みおよび満足度においては、「そう思う」群(とてもそう思う/そう思う)と「どちらでもない」、「そう思わない」群(そう思わない/とてもそう思わない)の3つに分けて比較した。また学修成果については、「身についた」群(身についた/ある程度身についた/どちらかといえば身についた)(しっかりと実施できた/ある程度は実施できた/どちらかといえば実施できた)と、「身についていない」群(身についていない/あまり身についていない/どちらかといえば身についていない)(全く実施できなかった/ほとんど実施できなかった/どちらかといえば実施できなかった)に分けて比較した。

4) 統計処理

統計処理は表計算ソフト EXCEL (Microsoft 社) を使用し、各項目間の比較にはカイニ乗検定を用い、有意水準は全て危険率5%未満とした。

Ⅲ. 結果および考察

1) 学生の取り組みについて

表3は学生の取り組みに関するアンケートの集計結果である。すべての質問において「そう思う」群が「どちらでもない」と「そう思わない」群よりも有意に高い値であった。(質問1, 2, 4: $\chi^2 = 105.00, p < 0.01$) (質問3, 5: $\chi^2 = 100.07, p < 0.01$)

表3 学生の取り組みに関するアンケートの集計結果

	①そう思う群	②どちらでもない	③そう思わない群
(質問1) 雪上講習に積極的に取り組みましたか？ ($\chi^2=105.00, P<0.01$ ①>②, ①>③;P<0.01)	100.0% (70人)	0.0% (0人)	0.0% (0人)
(質問2) 夜の講義、実習日誌の作成にしっかりと取り組みましたか？ ($\chi^2=105.00, P<0.01$ ①>②, ①>③;P<0.01)	100.0% (70人)	0.0% (0人)	0.0% (0人)
(質問3) 体調の管理やケガの予防に努めましたか？ ($\chi^2=100.07, P<0.01$ ①>②, ①>③;P<0.01)	98.6% (69人)	1.4% (1人)	0.0% (0人)
(質問4) 宿舎では部屋を整理整頓し、規律を守って生活できましたか？ ($\chi^2=105.00, P<0.01$ ①>②, ①>③;P<0.01)	100.0% (70人)	0.0% (0人)	0.0% (0人)
(質問5) 実習(全体)に積極的に取り組みましたか？ ($\chi^2=100.07, P<0.01$ ①>②, ①>③;P<0.01)	98.6% (69人)	1.4% (1人)	0.0% (0人)

全ての質問において学生の取り組みが高かった要因として、本プログラムが教職課程の一環として実施されており参加者の意識が高かったこと、またほとんどの受講者は雪山が初体験であり、緊張感をもっていたことが考えられる。

磯貝³⁾はスキー実習への取り組みなどの活動のあり方が、自己効力感の向上に大きく関与していることを示唆しており、今回の実習においても取り組みの高さから、自己効力感の向上があったことが推測される。

2) 学修成果について

表4は学修成果に関するアンケートの集計結果である。すべての質問において「身についた」群が「身につけていない」群よりも有意に高い値であった。(質問1： $\chi^2 = 70.00$, $p < 0.01$) (質問2： $\chi^2 = 66.06$, $p < 0.01$) (質問3： $\chi^2 = 62.23$, $p < 0.01$)

スキーの知識や技能の向上については、本実習の受講者は初心者割合が高かったため、実習を通して知識や技術の向上が比較的容易に得られたと考えられ、片山らの先行研究⁹⁾においても同様の結果となっている。また受講者の技能レベルに応じて適切に班編成が行われたことや比較的少人数であったこと、的確な指導がなされたことなども要因であると考えられる。

団体行動や仲間との共同生活については、ほとんどの受講者は何らかのスポーツ活動に従事した経験があり、抵抗なく活動が行えたものと考えられる。

磯貝³⁾はスキー上達の認知がスキー効力感と関係のあることを報告しており、今回の実習においても同様の効果があったものと示唆される。

表4 学修成果に関するアンケートの集計結果

		①身についた群	②身につけていない群
(質問1)	スキーを安全・快適に実施するための知識や技能が身につきましたか？	100.0%	0.0%
	($\chi^2=70.00$, $P<0.01$)	(70人)	(0人)
(質問2)	自分の立てた目標をどのくらい達成できましたか？	100.0%	0.0%
	($\chi^2=66.06$, $P<0.01$)	(69人)	(1人)
(質問3)	団体行動や他の仲間との共同生活はしっかりと実施できましたか？	98.6%	1.4%
	($\chi^2=62.23$, $P<0.01$)	(68人)	(2人)

3) 満足度について

表5は満足度に関するアンケートの集計結果である。すべての質問において「そう思う」群が「どちらでもない」および「そう思わない」群よりも有意に高い値を示した。(質問1： $\chi^2 = 105.00$, $p < 0.01$) (質問2： $\chi^2 = 90.64$, $p < 0.01$) (質問3： $\chi^2 = 77.57$, $p < 0.01$) (質問4： $\chi^2 = 95.29$, $p < 0.01$) また質問3では「そう思わない」群が「どちらでもない」よりも有意に高い値を示した。(P<0.05)

講師はスキースクールのインストラクターをはじめ、有資格者や指導歴の長い教員が受け持ったことから、個々の技術レベルや課題にあった、適切な指導が行われたと推察される。

講義については初めて触れる内容が多く、興味を持つ受講者が多かったと考えられる。

また宿舎には食事を学生向けにするため量を増やす配慮等を要望し、受講者からは一定の満足度を得られたが、1部屋の人数やお風呂の広さに関しては不満の声もあがっていた。

表5 満足度に関するアンケートの集計結果

	①そう思う群	②どちらでもない	③そう思わない群
(質問1) 講習内容は満足できるものでしたか？ ($\chi^2=105.00, P<0.01$ ①>②, ①>③:P<0.01)	100.0% (70人)	0.0% (0人)	0.0% (0人)
(質問2) 夜の講義内容は満足できるものでしたか？ ($\chi^2=90.64, P<0.01$ ①>②, ①>③:P<0.01)	95.7% (67人)	0.0% (0人)	4.3% (3人)
(質問3) 宿舎での生活は快適で、満足できるものでしたか？ ($\chi^2=77.57, P<0.01$ ①>②, ①>③:P<0.01, ③>②:P<0.05)	91.4% (64人)	0.0% (0人)	8.6% (6人)
(質問4) 実習全体を通して満足できる内容でしたか？ ($\chi^2=95.29, P<0.01$ ①>②, ①>③:P<0.01)	97.1% (68人)	0.0% (0人)	2.9% (2人)

IV. まとめ

本実習は、「スキーの知識や技術を学ぶと同時に冬季スポーツや雪山での生活についての理解を深めること」、「団体生活を通して正しい人間関係や社会的態度を向上させること」、「非日常的な雪山の自然環境を体験することで指導者としての資質を向上させること」を目的として宿泊を伴う5泊6日のプログラムを実施した。

アンケート調査の結果から受講生が意欲的に実習に取り組む姿勢やスキーの知識や技術に関する一定の学修効果が確認された。また講習等のプログラムだけでなく環境面においても満足度が高かったことは、スキーの技術が向上しただけでなく、本実習の目的、プログラム内容、スキーの楽しさが受講者に伝わった結果であると考えられた。

しかしながら今回の学修成果の評価はあくまでも受講者自身による自己評価である。近年の大学教育で求められている学修成果の可視化においては、より客観的な指標による検証が必要である。今後は知識の到達度を確認する試験やスキー技能検定⁸⁾のようなスキー技能を確認する評価法を導入する必要性が示唆された。

また教員や健康づくりのための指導者に求められる能力は多様化している。かつては多くの中学校や高等学校も修学旅行としてスキーを実施してきたが、近年では他のプログラムへ変更するケースも少なくない。特に大学においては種目としてスノーボードを検討する取り組みも見られる¹³⁾。

今後は様々なウィンタースポーツのアクティビティーをどのように教材や商材として活用するのかが求められており、大学におけるスキー実習においても人間形成や社会人基礎力の向上だけでなく、教育や健康指導の現場でどのように活用できるのかという観点からも検討する必要があると考えられる。

V. 参考文献

- 1) 新井健之ほか, 高等教育機関におけるスキー・スノーボード実習の実態調査報告1-平成20年度のスキー・スノーボード実習の実施状況-, 日本体育学会予稿集, 第61回, 2010.
- 2) 東山昌夫, 近郊の自然環境でおこなう継続型登山授業の実践報告-平成27年度トレッキング実習-, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 51, 105-117, 2016.
- 3) 磯貝浩久, スキー実習が学生の自己効力感に及ぼす影響, 大学体育, 2, 25-36, 2005.

本学のスキー実習における学生の取り組みと学修成果および満足度に関する報告

- 4) 片山昭義ほか, 福祉系大学におけるスキー実習の学習効果に関する一考察 - 事前講習の意義と実習本番に与える影響について -, 浦和論叢, 35, 69-84, 2015.
- 5) 公益財団法人日本生産性本部, レジャー白書 2016 少子化時代のキッズレジャー, 生産性出版, 2016.
- 6) 公益財団法人日本修学旅行協会名古屋事務所, 日本修学旅行協会, 平成 30 年度実施修学旅行実施状況, <https://jstb.or.jp/publics/index/18/>, 2020.12.1.
- 7) 公益財団法人全日本スキー連盟, 日本スキー教程指導理論編, スキージャーナル社, 2003.
- 8) 公益財団法人全日本スキー連盟, スキー指導者必携, スキージャーナル社, 2009.
- 9) 公益財団法人全日本スキー連盟, 資格検定受験者のために, 山と溪谷社, 2019.
- 10) 松尾美香ほか, 大学における自然体験学習のねらいとその教育効果に関する研究, 岡山理科大学紀要, 第 52 号, B, 49-59, 2016.
- 11) 永井将史ほか, 本学スキー実習の取り組みと学習成果に関する報告, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 52, 119-126, 2017.
- 12) 中澤史ほか, スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 32, 9-13, 2014.
- 13) 田原亮二ほか, 本学学生のスキー・スノーボードに関する実態・意識調査, 福岡大学スポーツ科学研究, 40 (1), 33-39, 2009.
- 14) 蓬田高正ほか, 大学スキー実習参加者のスキーに対する魅力認知に関する研究, 大学体育研究, 25, 31-38, 2003.

